見る 聞く 広める
仮称 山里新聞
第1号
2018年11月15日発行
発行所 NPO法人山里文化研究所
岐阜県中津川市茄子川364-10 〒509-9132
Tel 090-7615-6396
1部80円

南伊豆

炭焼きと自給の野菜づくりから、キヌサヤ、椎茸、イチゴの農業へ

なんのこたぁねえ、ずっと百姓さ

話し手／鈴木アイ子（90歳）　大正11年10月静岡県下田市箕作生まれ

百姓は、最初は蚕をやって、牛を飼って乳を搾ってただけ。おじい（夫）は箕を作ったりしたかなぁ。竹箕じゃないよ、藤蔓。桜の皮も使った。それを売りに歩いたっけよ。

ほかには食べる野菜と米を作った。そして大豆と小麦と大麦。小麦はうどん。大麦は飯に入れて食べた。麦茶は大麦。大豆は味噌、それと醤油。うちで作った大豆で、麹を寝してな。麹は醤油を作るには大豆麹。米麹じゃないよ。

大豆を煮て、醤油麹菌を入れて寝したのさ。麹菌は麹屋から買ってきた。麹ができたら、煮た大豆に混ぜるのさ。そして、一年間樽へ入れて、毎日一回ずつ掻き回した。

そして、一年経ったら搾るのさ。初めは自分で搾ったけんど、そのうちに醤油を家へ作りにくる人がいたよ。

味噌は、米とか麦でもいい、麹菌を入れて麹を作って、豆を煮て臼で搗くだよ。それに麹を混ぜて樽へ詰めるだよ。一度に一斗くらいだな。作ったのは。豆が一斗、麹が一斗。それは毎年作ったな。一年に一回。

大豆は秋に採るだよ。大豆は昔は消毒なんてしなくたっていくらでもできたよ。虫なんていなかったよ。田んぼの畦にも作ったけど、普通に畑でも作ったよ。

麦は家で扱いて精米に出した。麦はみんな自家用。昔はみんな自家用。うちで食べるだけ作った。

そうだなぁ、野菜を市場へ出したのはずっとあとだな。

最初に市場へ出したのは、ウリとかナスとかだな。

キヌサヤはもっとあと。それは農協。農協が始めただなぁ。

キヌサヤを作るには、山を開墾した。始めに木を伐って、カタギは椎茸をやっただよ。炭を焼いたり、種類によって木を使った。

よそのうちの山をやるだからな、山を借りて、あとは苗を植えてなす（返す）。苗木はそこのうちで買うだよ。それを植えてなした（返した）。

山の木は全部伐って、そして燃やしてな、それから一段一段、段を作って。そしてキヌサヤの種を蒔いた。山の斜面を段にしただから。

そして、二年間やったら木を植えてなす。そしてまた次の所を借りて開墾した。キヌサヤは十年ぐらいやったつら。十年じゃきかないかな。須原の山、四町歩の山をやって、白浜山はそうだな、どんきゃあやったかなぁ。あそこはみんなで大勢でやったからな。

焼け野もやったよ。茅野。

椎茸だ豆（キヌサヤ）だ結構やった人はえらかったよ。須郷の方や、宇土金の〈谷戸〉だの〈ニイシエ〉だの〈和手の下〉だの。結構えらかった。みんなが椎茸をやりながら豆をやった。

豆はうちじゃあ、みんな山でやった。下で、平地でやった人もいたなぁ。だけど下だと早く霜が降りるからなぁ。須郷の山をやるときはほかの人にもやらしたよ。四町歩だから自分ばっきゃあじゃなぁ。山の陽あたりとかもあるから場所をみてさ。

白浜山やんときゃあ大勢だったじゃ。白浜山は、山ん上洞の上の方。白浜の山。焼け野の下さ。〈新家の隠居〉の山の下。

あそこをやったときはさぁ、宇土金の〈谷戸〉に〈伊郎治の下〉に〈平戸の下〉に…大勢やったじゃ。〈二声〉に、うぅん、ええかん大勢いたなぁ。共同でやった。火を燃すだもん。みんなでやった。

それからくじ引きで場所を決めて、あとは自分自分。自分ちの分を開墾して段を作ってさ、種を蒔いた。種を蒔くのは8月、盆ころかな。十月の祭り（十月十五日）ごろから摘んで、正月までやったかな。暮れには霜がおりて豆がしもげて売り物にならなくなるから。

豆はキヌサヤさ。農協だから、市場には出さない。だけど、一時東京送りをやったかなぁ。

キヌサヤを終わるころ、イチゴをやった。イチゴも農協で取っただから。イチゴを始めたのは清人（孫）が生まれたころかな。清人をコンテナに入れて、子守りをしながらやっただよ。

苗を天城山へ上げればイチゴがクリスマスに間に合ったがだけどな。だんだんと品種も違ってくるし、うちは自分のうちで苗取りをして苗を作って、天城山には上げなかったから、採るのは二月、三月だった。

初めはトンネル。それで、三月から七月まで採ったよ。最初はそのあとで田んぼにした。だから八月に田植えしたり。そしたら米がまじいっけなぁ。それでやめたけど。

それからハウス、初めて電照をやった。それで一月から採った。

直売を始めたのは、農協へ出すのが間に合わないからやっただよ。赤らみすぎるから。農協へ出すには白いようながを採って詰めるだから。

直売を始めたら、お客さんが採ってくるがを待ってたりさ、下田からも買いに来た。

それで、農協に怒られたりさ。農協にも出してたけど、みんなそこで売れちまったりしてさ。それから、だんだんイチゴも少なくして直売だけにした。

それで、イチゴを小屋で詰めながら野菜の直売もやってた。野菜は無人で。無人はここらじゃあまだ、だあれもやってなかった。

始めのうち野菜は市場へ出してた。キュウリなんかはキュウリ組合ちゅうがを作って市場へ出したりしたけど。下田市場と稲取市場。だけんど市場じゃバカにして買いたたかれて、一円とかにもされてただよ。それじゃあなぁ。

ほかにそのころやったのはナスとトマト。イチゴのハウスのあとでトマトをやったよ。おらうちのトマトをみて、この種類がいいって言ってそれからやった人もいる。その種類を今でもやってるよ。瑞栄。

なかなか今はないよ。だから種で買うのさ。自分で播くだよ。

椎茸はずっとやったかな。東京送りで。隅田市場。平野運送で送った。生で箱に詰めて送った。そうすると電報で値段を言ってよこした。ここらじゃ一軒だけだった。一回に二十箱くらい送ったなぁ。

菌は何万打ったかなぁ。忘れたなぁ。明治と森と両方打った。木は冬の間に伐るから、駒打ちは寒い時で、その頃は、イチゴは採るのが三月ごろだったから、まあだイチゴは成らないから、その前に駒打ちをやった。

椎茸は乾燥機もあったよ。

乾燥椎茸でさぁ、農林省の賞をもらったけじゃ。その時が第一回の農林まつりだった。おじいが農林まつりへ行って、その時にもらった。そんでさ、表彰式でなんか賞品をいろいろもらってさ、えらくて、持てなくて、ハイヤーできた。下田の農林まつりさ。一緒に行った人がみんなバスで降りたに、おじいが降りないから聞いたら、「おとうはハイヤーでくるよ」って言ってた。褒美がえらくて持てなかったって。

炭焼きは、家の裏でもやったじゃ。裏の山の向こう側の〈山ん上〉の山で、相玉の人の炭窯の天井が落って、火事になったけじゃ。

炭は山から背負い出して置く場所があって、炭の検査員が検査してさ、宇土金の〈仲屋〉のおじいが仲買で、その人が買って。

炭は俵で出した。俵は自分で編んださ。茅で作るだよ。茅は茅野で刈って背負ってくんのさ。編む台があっただよ。みんな自分で編んだよ。うちのがを買うようなことはなかったよ。

俵はうちのがだけじゃなくて、内職にどんだけ編んだかわかんねぇ。よけいに編めば売れるから、売ったのさ。ええかん編んで。一わ二十円か、そんなもんだった。

毎年茅は刈って置くんさ。そして、長いのは俵に編んだり、短いのはうちで使わないときゃあ貸しておくのさ。だから、茅刈りはうんと一所懸命でやった。

家の屋根替えをやるよっていうとさ、そこのうちで茅を貸してあればそけえなしたりさ。貴重だったの、茅は。

茅刈りに行くにさぁ、おじいはさ、「牛乳を搾んだから、搾ってて上がって来る」ちゅうからさ、おれは、「〈新家の隠居〉の裏の山でオオキバ採ってえてから、茅刈りへ登ってんから、昼間の飯を持ってきてよ」って言って行ってぇたらさ、おバアが飯をくんなくてさ。おじいは「くれえ」って言えなかった。「飯を持ってけよ」って言うおバアじゃなかったよ。

だから飯を食わずにさ。茅野に雪が溜まってて、しょうがねえ、雪を食って茅を刈った。飯も食えなかったよ。

一番先の子が松子だった。乳が出なくてさぁ、干し殺したよ。ちょうど誕生だった。弱かったからさ、本当はゆり子っていう名前だっただけど、松子って名前だけ変えて呼んでただよ。立てえなかった。栄養失調。

乳がないからさ、杯一杯、米を冷やかして、カメの蓋の上に置いたのさ。おバアが朝起きてきて。「これなんだ」って言うから、「これは乳が出ないから、すり鉢ですって飲ませようと思って」って言ったら、「われんがじゃねえから、そんなことしちゃならねえ」って。仕方ないから、釜の中へ入れて一緒に炊いた。そうしちゃあ腹空かして泣いて夜を明かした。

だから、〈下〉のみつ子さんや、〈井戸〉のはな子さんにもらって乳を飲ましたもんだ。人の乳を。

おバアは、「女には金を持たせんな」って、絶対おれには持たせなかった。だからおれの金はないけどな。

すげえおバアだったもの。

無人売店はもう三十年じゃあきかな

椎茸の駒打ちの日。おこじゃだよー。みんなで休む楽しいひととき

直売所の小屋でひと休み

南伊豆

豊かな海産資源を育てる

南伊豆の海　南伊豆の聞き書きから

吉田　謹治

平成25年2月に南伊豆の聞き書きが出版された。8編の聞き書きの中で2人の海女さんの話が載っている。

三重県から南伊豆の伊浜に出稼ぎ（もぐり）にきて伊浜に嫁に入った肥田トラ子さん（80歳）の話。もう一つは地元下流に生まれて、中学を卒業すると東伊豆や西伊豆の海にもぐりの出稼ぎに出て今は伊豆高原に住んでいる石井みのりさん（77歳）。2人の海女さんの話が載っている。

トラ子さんは遠く三重県から出稼ぎに来た。肥田さんのみならず、南伊豆町内の仲木や入間の村にも三重県から嫁に入っている。60～70年前の南伊豆の海は三重県から出稼ぎのもぐりに来るほど海産に恵まれていた。肥田トラ子さんが出稼ぎ先の伊浜で結婚してからも夜磯に行くと大潮の晩なら岩からアワビが顔を出していて「アワビの月拝み」の光景が見られるほど豊かな海だった。

一方、下流生まれの石井みのりさんは卒業すると海女さんになり、地元で潜るのではなく、東伊豆の稲取や西伊豆の海に半年間、もぐりの出稼ぎに行った。雇われていくわけだったが大きな稼ぎができたという。

それから時は50年たち、現在では東伊豆の海岸では貝をはじめとする海産物の漁獲は少ない。一方南伊豆は最盛期よりは減っただろうが、水準を維持しながら一定の漁獲はあるようだ。この差はなにか？

南伊豆の海の関係者の話によると東伊豆は規制が緩く、いうなれば取り放題ということを長年やってきた。獲ったもの勝ちの状態が続いた。片や、南伊豆は漁協が中心となって規制が厳しく、貝や伊勢海老、天草など海明けの日や日数まで漁村ごとに決まって、厳密に守られてきた。密猟などの取り締まりも厳しい。

県の水産試験場で育てたアワビの稚貝は各漁村に配布して放流している。南伊豆の現役の海女さんによると、放流時、水温の低い時であってもウェットスーツを着て割り当てられた稚貝をもって海に潜り、アワビの生息に適した岩場の下の穴にそっと入れて育つのを願うのだそうだ。放流だからといって岸から海に投げ込むようなことをしてはたちまち稚貝は魚のえさになってしまうのだそうである。ほかの漁村がそのような丁寧なことをやっているかは疑問と言う。

農業は育てながら年月を経て、やっと収穫の恵みを売ることができる。一方、漁業はいかにして見つけ出して誰よりも早く獲るかという、育てながらの感覚がないところが農業とは違うところだ。

南伊豆の漁獲が守られているのはどの漁村も半農半漁だ。農業をやりながら漁業にも携ってきて将来を見据えて皆で取り決めて今までやってきたのだろう。

南伊豆の聞き書き「ききがきや」の仲間たち

聞き取り／２０１２年12月
聞き書き／山本はま子

（享年九十三歳）

奥三河

袴でテニス、象の見物

大正初期の小学校と子ども

関谷修治　明治38年生（当時83歳）

私は大正七年に田口尋常高等小学校（現愛知県北設楽郡設楽町田口）を卒業しました。

私が小学校の頃の校舎はコの字形で、当時はとてもモダンな建物だったと思います。中野屋の横の道から入ると、今の給食室と図書館の間あたりに屋根つきの玄関が開いていました。玄関には黒板や掲示板があり、各学年の優秀な図画や習字の作品が展示されていたのを覚えています。そこを抜けると運動場に出ます。玄関の左に教員室、右に教室が二つあったように思います。今は真ん中に校舎がありますが、当時はありませんでした。校舎のすぐ前には桜がずっと植わっていました。それから、今の講堂の位置だと思いますが、雨天体操場がありました。雨や雪が降ると、体育の授業、朝会や夕会、集会などをしました。そこから土間の渡りを通って、下駄箱の所を通ると、各教室の廊下につながっていました。

太田口の道に平行して建っていた校舎には、つっかい棒がしてありました。最初の部屋が裁縫室で、続いて普通教室が五つくらいありました。裁縫室に続く三教室は、部屋の境の戸をはずすと、一つなぎの長い部屋にできるようになっていて、天長節や紀元節などの四大節の式場や学芸会の会場になりました。裁縫室の奥は奉安庫になっていて、御真影が納められていました。教室に続いて湯沸し室・湯飲み場が今の給食室あたりにありました。また、そこには打鐘がありました。当時、ほかの学校では振鈴を使うのが普通だったようですが、田口小学校では、鐘が合図に鳴らされました。さらにそこからかぎの手に曲がると、教材や標本のある部屋、普通教室があって、教員室に続くというつくりでした。

本町の方からは、今の伊藤進崇さんの家の横から憩いの家の前を通って、人が通るだけの一本道が「いなば」の川端まで続いていました。そこで学校の方と太田口の方に行く道とに分かれていたのです。川には木を二つ割りにした橋がかかっていて、桑畑の間の道をぬけていくと運動場に出られたのです。

昭和の初めに校舎が火災にあい、再建するときに前の山を崩して運動場を拡張したのですが、それまでは川まで畑や桑畑でした。墓地もありました。岩古谷の戦の落武者の墓とか、お姫様の墓とかいわれていました。

当時の子どもの様子というと、みな着物で天気のよいときはわら草履、雨の日は下駄でした。男子の中には掛け鞄で通学している子もいましたが、ほとんどは風呂敷に用具を入れて通っていました。卒業写真見ると二、三年下の裕福な家の子たちから洋服を着るようになったようです。履物については、高等科を出る時分になって、やはり裕福な家の子がアメゴムの靴を履いてくるようになってきたのですが、その子は登下校のときだけ靴を履いていたのです。なぜかというと、学校の中では子ども同士で順番を決め、交代で履かせてもらっていたから本人は履けなかったというわけです。

尋常の五年になると、庭球をやらせてもらえるようになりました。コートが二面しかなかったので、各学年、男女別に割り振りが決まっていて、週に一回くらいしかできなかったのですが、その日は朝の始業前、昼放課、授業後と真剣にやったものです。「庭球には羽織袴を着て、草履か裸足でする」というきまりがありました。羽織袴を貸し借りし合ってやったものです。つい夢中になって、買ったばかりの草履をはきつぶして、親から大目玉をくらったこともありました。草履は当時五銭くらいでした。大工や左官の日当が七、八十銭の頃ですから叱られて当然です。

大正八年と思います。電灯が田口、大名倉、宇連、松戸に入りました。発電所は大名倉にできたのですが、トンネルを掘るというので、学校が終わってからや、休みの日にはわざわざ見に言ったものです。なにしろトンネルといえば、与良木のトンネルしかなかった時代でしたから。いよいよ電灯がついたそのとき、「こんな明るいものがあるのか」と本当に驚きました。今思えば、タングステンの糸が入った簡単な造りの電球で、そんなに明るいというほどのものでなかったかもしれません。電灯から蛍光灯に変わったときも明るいとは思いましたが、それとは比べものにならない驚きでした。在（中心地から離れた所）ではカンテラを使っていた家もまだ多かったと思います。それまでは、家に帰るとまずランプのほや掃除と油差しが、子どもの日課になっていたのです。電灯のおかげで遊びの時間がふえたというのも、子ども心にうれしかった思い出です。

そのほかに思い出すことは修学旅行のこと、東三自動車（乗合自動車）ができ、初めてビュイックという五、六人乗りの自動車がきたとき、また、サーカスの象が田口を通って飯田に行くため加周（屋号）の倉庫に入れられたとき、田口じゅうの人が見物に集まったことなどいろいろありますが、なににつけ、時代の変化を強く感じます。

聞き取り／昭和63年5月
聞き書き　伊藤嘉人